

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	池田 明子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
能力ベースの幼児の見取りに関する基礎的研究 －幼小接続期の5歳児に着目して－			
論文審査担当者			
主 査 教授 井上 弥			
審査委員 教授 鈴木由美子			
審査委員 教授 児玉真樹子			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、保育現場において保育者に求められている幼児の能力の育成という観点から、能力に着目した保育実践の在り方について検討したものである。現在、幼児期における能力の育成が重要視され、社会的状況に対応する資質・能力の育成が幼児期から小学校期以降の学校教育で求められるようになってきている。しかし、幼児の能力に関する先行研究は特定の場面や能力に限定したものが多く、幼児の生活全体を通して諸能力を総合的に育成することを基本とする保育現場では活用しづらい。また、資質・能力の育成が求められてはいるが、その具体的内容や見取り方については明らかではない。そこで、本論文では、幼児の能力の具体的内容を明確にし、能力に着目した保育実践の有効性を検討するとともに、能力の見取りを支援する方策について提案している。また、能力に着目した保育実践は、能力観や教材観の異なる幼児期と小学校期をつなぐ時期である幼小接続期の5歳児に対して有用であるという考えから、特に幼小接続期にあたる5歳児の能力に着目している。</p> <p>本論文は5つの章から構成されている。</p> <p>第1章では、能力の捉え方を整理するとともに、能力の見取りの必要性について論じている。まず、幼児期からの能力の育成は重要視されているが、「能力」に関係する用語として「資質・能力」「力」といった様々なものが使われ、整理されていないことを指摘している。また、アビリティ(ability)、スキル(skill)、コンピテンス(competence)といった能力に関係する用語について整理し、いずれも内容的に関連し合い、相互に影響し合っており、不可分であることを示している。それらを踏まえ、本論文では、幼児の能力を、言語能力・運動能力などの認知能力と有能感・自制心・共感性などの社会情緒的コンピテンスの両方を含んだものとして捉えている。また、幼児教育ではこれまでも能力の育成はされてきているが、そのことを保育者自身があまり意識していないという指摘を踏まえ、幼児の能力を育成するにあたっては、保育者による能力の見取り方を支援する必要があることを指摘している。</p> <p>第2章では、保育者が捉えている幼児の能力の具体的内容を明らかにするとともに、幼児の能力を育成する保育者の支援について整理している。まず、幼児の能力を具体的に捉えるために、保育観察を通して、保育者が一般的に用いている「力」という用語の背後に含意される能力について検討し、幼児の力の背後には、認知能力、社会情緒的コンピテンスなどや、関連し合っ</p>			

揮される自己制御力、思考力、共感性、有能感あるいはメタ認知の基礎と思われる能力などの様々な能力があることを明らかにしている。また、保育参加した小学校教師と幼稚園教師の協議を基に、5歳児と1年生の共通点・相違点から5歳児の能力育成について整理している。幼稚園・小学校教師とも、感覚を生かしながらの思考力の育成を重視していることは共通しているが、1年生では感覚を通してながらも素材の性質に気づく力の育成を重視し、5歳児では感覚の育成を重視していること、また小学校では特定の能力に焦点化して育成しているが、5歳児では様々な能力を総合的に関連させながら育成していることを述べている。このような保育の観察や小学校教師との協議を踏まえ、更に文献研究を通して整理した結果、幼児の能力として、自発性、有能感・有用感、道徳性・共感性、メタ認知、自己制御力、思考力、感覚・知覚、運動技能、言語能力、表現力という10の能力を導き出している。また、それぞれの能力の具体的内容を幼児の見取りとし、能力を育成する保育者の支援を整理している。

第3章では、幼児の能力の具体的内容を見取りの観点とした保育実践の有効性について検討している。5歳児を対象とし、第2章で明らかにした10の能力に留意した保育を実施するように保育者に依頼し、その有効性について観察を通して検討している。その結果、道徳性、自己制御力、運動技能、言語能力が伸びることを明らかにし、保育者が能力に着目して保育実践を行うことが有効であることを示した。しかし、4つの能力以外では変化が見られないことから、10の能力では見取りの観点が多すぎる可能性、また保育者が10の能力の概念を理解しきれない可能性から、見取りの観定の工夫が必要であることを指摘している。

第4章では、保育者が幼児の能力を見取りやすいように、遊びの見取りチャートを提案している。類似した能力の見取りの観点をまとめ、能力の概念を理解しやすいように「見取りの具体的な観点」と「能力からみた支援の観点」を明記したチャートを作成し、保育者に実際に活用してもらっている。その結果、チャートを活用することで能力の見取りや育成の仕方について具体的に意識しながら保育実践を行うことが可能であることを示している。

第5章では、第2章から第4章までの研究結果をまとめ、本論文の意義を3点にまとめている。1点目は幼児の能力の具体的内容を明らかにしたことである。2点目は幼児の能力を見取り、育成する保育実践の有効性について実際に検討したことである。3点目は幼児の能力の見取りを支援する方策として、遊びの見取りチャートを開発したことである。以上3点が、能力ベースの幼児の見取りを支援する方策について研究を進めた意義であることを述べている。

本論文は、以下の3点において高く評価することができる。(1) 幼児期の能力育成の重要性が明白になっている中で、実際の保育現場では能力についてこれまではあまり意識されてこなかった現状を踏まえ、幼児の能力を具体的に提示したこと(2) 実際に幼児の能力を意識しながら保育実践を行うことが有効であることを示したこと(3) 遊びの見取りチャートを開発し、保育実践を行ううえで能力をより具体的に意識しやすい支援を提示していることの3点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。